

地下の正倉院展

申然而已身者今聞天地乃

平城宮跡資料館 平成26年度 秋期特別展

簡^を学^{する}
木科

ごあいさつ

すっかり秋も深まってまいりました。今年で八回目を迎える「地下の正倉院展」も、この時期の奈良の風物詩として定着してきたように思われます。今回も三期にわたり、平城宮・京跡出土の木簡を七〇点以上出品いたします。この機会に、普段はなかなかご覧いただけない本物の木簡に親しんでいただければと思います。

今回は、これまでとは少し異なる観点から木簡をご紹介します。「墨書を持つ出土木片」である木簡は、本来的に木製品であり、また考古遺物でもあります。重さや大きさ、カタチをもつ物質としての側面を有しています。どんな木取りをしているか、どんな木からできているのか、後世に伝えてゆくためにはどんな処置が必要か——記載内容に関心が集中しがちな木簡も、ちょっと見方を変えれば、驚くほど多彩な相貌を見せてくれます。モノとしての木簡を、科学的な視点を交えつつ見つめる、それが今年のテーマです。みなさまもぜひ、会場で本物の木簡を間近に観察し、想いをめぐらせ、お楽しみいただければ幸いです。最後になりましたが、今回の展示にあたりご後援をいただいた皆様、あつく御礼申し上げます。

二〇一四年一〇月

独立行政法人国立文化財機構
奈良文化財研究所長

松村 恵司

1. 本書は、奈良文化財研究所平城宮跡資料館でおこなう平成26年度秋期特別展「地下の正倉院展 - 木簡を科学する -」にちなんで編集したものである。本特別展は、当研究所都城発掘調査部史料研究室が企画し、埋蔵文化財センターの各研究室および企画調整部展示企画室が全面的に協力し開催する。（会期2014年10月18日（土）～11月30日（日））
2. 木簡の保存に万全を期すため、会期中は約2週間ごとに2回の展示替えをおこなう。
3. 木簡の写真は、原寸の75%に縮小して掲載した。写真下のアラビア数字は本特別展における通し番号を示す。なお、木簡の写真は文字のある面はすべて掲載することを原則としたが、一部表面のみ掲載したものが、その場合は番号の箇所に「表面」と注記した。
4. 本書の編集は史料研究室 山本祥隆と展示企画室 中川あやが担当し、本文の執筆は山本がおこなった。木簡の写真は企画調整部写真室 中村一郎が撮影し、鎌倉機が補佐した。作成にあたり、史料研究室 渡辺晃宏・馬場基・井上幸・方国花、展示企画室 加藤真二・中村玲が協力し、展示企画室 市原夕貴・廣瀬智子が補佐した。
5. 本特別展にあたっては、以下の諸機関のご後援を得た。記して謝意を表する。
文化庁・国土交通省近畿地方整備局飛鳥歴史公園事務所・奈良県教育委員会・奈良市教育委員会
読売新聞社・近畿日本鉄道株式会社・奈良交通株式会社・株式会社南都銀行・本間学会

6AAI GJ59 R-915 6AAI GJ59 R-916 6AAI GJ59 R-917 6AAI GJ59 R-936 6AAI GJ59 R-938 6AAI GJ59 R-939 6AAI GJ59 R-921 6AAI GJ59 R-922 6AAI GJ59 R-923 6AAI GJ

6AAI GJ59 R-915 6AAI GJ59 R-916 6AAI GJ59 R-917 6AAI GJ59 R-936 6AAI GJ59 R-938 6AAI GJ59 R-939 6AAI GJ59 R-921 6AAI GJ59 R-922 6AAI GJ59 R-923 6AAI GJ

木簡を、科学する！
って一体どういうこと？ そもそも科学って何だろう？

一言で表すのは難しいけれど、
客観的に観察し、分析し、考察し、探究するために
モノやコトにじっくり向きあい、好奇心にあふれた眼差しをそそぐ

それが「科学する」ということで、その結果として得られた知識が「科学」
そんな風には言えないだろうか

木簡は、ただの文字資料ではない
だれかが木から作り出し、文字を記し、なにかに使われ、捨てられて
長い眠りののちに、ふたたび私たちの前にあらわれたモノたちである

いろんな材から作られ、カタチがあり、重さがあり
土のなかですいぶん変質し、他のものと一緒に遺跡から見つかる
木製品であり、考古遺物でもある木簡

さあ、自由な発想で、さまざまな角度から見つめ直して
木簡を科学してみよう

6AAI GJ59 R-915 6AAI GJ59 R-916 6AAI GJ59 R-917 6AAI GJ59 R-936 6AAI GJ59 R-938 6AAI GJ59 R-939 6AAI GJ59 R-921 6AAI GJ59 R-922 6AAI GJ59 R-923 6AAI GJ

6AAI GJ59 R-915 6AAI GJ59 R-916 6AAI GJ59 R-917 6AAI GJ59 R-936 6AAI GJ59 R-938 6AAI GJ59 R-939 6AAI GJ59 R-921 6AAI GJ59 R-922 6AAI GJ59 R-923 6AAI GJ

木簡と探查

掘らずに土の中をみる——まるで魔法のような調査法が、近年実用化されてきている。地中レーダー探查である。この、地下の様子をうかがう画期的な技術、実は木簡の発掘に援用されたこともある。木簡の調査・研究も、掘り出さなければ始まらない!!



1

二〇〇八年、平城宮の東方官衙と呼ばれる地区で、巨大な土坑「ゴミ穴」の一部が見つかった。試しに少し土を取り上げただけで、中には木簡がいっぱい。全体を掘り上げたら、どれほどの点数に達するのか——この時、遺構の把握や遺物の受け入れに万全を期すために、あらかじめ地中レーダー探查で土坑の規模を推定するという手法が試みられた（詳細は五頁「ほれ話①」参照）。

四・五頁の木簡は、すべてその大土坑から見つかったもの。まだ調査・研究の途上にあるため保存処理は施されておらず、みな水漬け状態で保管されている。ちなみに奈良文化財研究所（以下、奈文研）では、木簡の保管にホウ酸とホウ砂を溶かした水溶液を用いている。

1は、驚くほど最終画が長い「行」の字が目を引く異形の木簡。中国の古い筆法「懸針」（特定の文字を強調するために最後の画を長く伸ばす書法）を練習したものと考えられる。木目と垂直の方向に文字が書かれるのも特徴。

6は銭に付けられた付札。類品も一揃に多く見つかったおり、それらを含めた記載の内容から、鑄銭工が自身の鑄た銭を「〇〇〇文ずつ束ねて上納した際に使われたものと見られる。

4は「年魚」のスシの付札。奈良時代のスシは、現在の滋賀県の名物・鮒ずしのような「なれずし」の類である。全体に作りは丁寧で、文字も端正に整う。

発掘前に入念に



調査の様子

本文で触れた東方官邸の土坑が見つかったのは二〇〇八年五月。たゞ、この時はトレンチ調査（遺跡の概算図が分かるために細い調査区を設けておこなう調査）だったため、検出できたのは土坑の東側の一部分のみであった。それでも五メートル四方は下らない。試みに一部を掘り上げ、コンテナで土を持ち帰り洗浄したところ、中には無数の陶片が……。その数、多いものでは一

箱で約七〇点!! 全体を掘り出したら行ほどの数に達するのだが、そもそも土坑は、どれほどの大きさなのであろうか——考古学の調査では掘削、遺構の平面形状を把握した上で掘削にかかる。加えてこの時は、確実に多層に出土するであろう木簡の整理の問題など、即座に掘り上げるのは難しい状況に置かれた。そこで、土坑を一旦埋め戻し、地中レーザ探

査と土坑の全体規模を把握し、遺構の調査と遺物の受け入れの双方に万全を期すこととした。その結果、土坑の規模は南北約七メートル・東西約二メートルと想定され、トレンチ調査が成果とあわせて、木簡の総数は一〇万感を下らないという見通しが得られた。こうして同年十二月、調査を終えて土坑の掘り上げに着手したのである。

大正十府宿奏

合九十三人

大正十府宿奏



5 赤外線写真



5



6



7



2



4

5は「魚取魚」（縦に細く切り干したカツオ）の付札。柾目材で木目が強く、肉眼ではほとんど読めないが、赤外線装置を使うと文字がくっきり浮かび上がる。
2は「鯉」（小型の巻き貝の一種、またはその総称）の付札。上端の切り込みに結わえられた紐がそのまま残っている。
7は「春宮」と書かれた小型の付札。春宮は皇太子のこと。上下両端とも、切り込みを入れるだけでなく先端を鈍角に尖らせる加工が施されるなど、細部まで丁寧に作り込まれた一品。
8は、左衛土府が宿直に当たった官人や兵士について報告した文書木簡。8を含め、この土坑からは衛府（軍隊）に関わる木簡が多く見つかった。

木簡を観察する

板目材の木簡

荷札にせよ、文書にせよ、木簡は本来的に木製品である。どんな木取りをしているか、どんな種類の木を使っているのか——木簡の、木製品としての特性、ともすれば見過ごされがちな横顔をのぞいてみよう。



14



10



12



11

どんな材を用いているか、割れているか完形か、加工は粗雑か丁寧か——活字の釈文^{しやくもん}だけをみていてはわからない観察ポイントが、木簡にはたくさん隠れている。あるいは実物の木簡を前にしても、文字面ばかりを追っていても、せっかくの面白味を見逃してしまうかもしれない。ひとたび私たちが木製品として眺める姿勢をもてば、木簡は、驚くほど多様な相貌をみせてくれるだろう。

木簡の木製品としての特性のうち、ここでは「木取り」と「樹種」を紹介。まずは木取り。丸太材からどのように切り出すかにより、材の表面にあられる木目（年輪）の様子は変化する。年輪と平行の方向に切り出したのが「板目」、垂直方向に切り出したのが「柃目」である。また、両者の中間的なものを「追柃目」と呼ぶこともある。

六頁の木簡はすべて板目材。なお、これらの木簡の側面には柃目模様が見られることが多い。

14は長屋王家木簡。王家を支えた二つの家政機関の間でやり取りされた文書木簡とみられる。上端の孔は他の木簡と一緒に束ねて保管するためのもので、文字を無視して穿たれている。

10は常陸国から送られた銭に付けられた荷札^{にせ}。状態もよく、表面に木目がほとんどあらわれないこともあり、文字は非常に読みやすい。



17



19



21



20

12は「海藻」(ワカメ)の「湯」(スープ)に使うイワシを請求する木簡。表面には縦方向に年輪が認められ、追柾目の材とみなすこともできるかもしれない。

11は宣命体(助詞を万葉仮名で表すなどして日本語をそのまま表記する手法)の文章が記された木簡。下端は真つ黒く焼けこげている。

七頁の木簡はすべて柾目材。柾目材は保存処理の際に変形しやすい。そのため、高級アルコール含浸工程に加えて真空凍結乾燥が施される。

17には、ひげを生やした人物の顔が描かれている。記されるのが絵だけの場合は木簡の定義から外れるが、17には文字も認められるため、木簡として扱われる。

19は、「資錢」という、勤務評定を受ける資格を維持するために納められた銭の付札。納めた人は山辺君忍熊、金額は五〇〇文である。

21は駿河国から送られた「煮鯉魚」(今日の鰯節のようなもの)の荷札。細かな文字が整然と書きつけられる。右端中央付近の切り込みの用途は不詳。

20は長屋王家木簡で、鰯鱧工人に支給する米の伝票。邸内に多くの職人を抱えていたことは、長屋王の実力を物語る。

なお、現在のところ、木簡の用途や内容による木取りの使い分けは確認できないようである。

樹種を見直す



ヒノキの顕微鏡写真 (200 ×)



サワラの顕微鏡写真 (240 ×)

近年、奈文研では、木簡の樹種特定に積極的
に取り組んでいる。樹種の特定は、古くは肉眼の
表面観察によるものが多かったが、現在は実体
顕微鏡や生物顕微鏡を使用し、より精密な観察を
明している。特に、生物顕微鏡による詳細な分析
により、従来考えられていた以上に多様な樹種が
木簡に使われていたことが明らかになった。
例えば、ヒノキ科のヒノキやサワラは、生物顕

微鏡を用いなければ識別不能である。分析の結果、これまでの方法ではヒノキ材とされていた木簡の中に、サワラを材とするものが一定割合含まれていることが判明した。他に、カヤやコウヤマキなどの木簡も見つかった。
現状では出土木簡全体の分析は難しいが、新たな分析方法の構築もあわせて、樹種特定は今後の進展が大きいと期待される研究課題である。



29



26



22

さまざまな樹種

29は広葉樹の木簡。筑後国から送られた煮塩年魚(塩で煮込んで加工したアユ)の荷札である。西海道(九州)からの荷札には広葉樹が多くみられる。本来は堅い木質をもつ広葉樹だが、土中では脆くなりやすい傾向があり、保存処理の際などには注意を要する。

26はスギの木簡で、柾目材の木簡でもある。隠岐国から送られたワカメの荷札だが、文字は薄れて読みにくい。日本海側の地域からの荷札にはスギ材が多く、特に隠岐の荷札はほとんどがスギ材という特色がある。

22はスギの木簡。現状では四片に分かれていて、ある役人の履歴書のような内容が、表裏両面にわたって記されている木簡である。

つづいて「樹種」。一般に、木簡に使われる樹種はヒノキが最も多く、スギがそれに続くといわれる(より詳細な樹種特定については「こぼれ話③」参照)。広葉樹の木簡はきわめて少ない。

木簡を保存する

PEG含浸法+FD

一〇〇〇年以上も土の中で眠っていた木簡は、とても脆く、不安定な状態にある。そんな木簡を守り伝えるために欠かせないのが、科学的な保存処理。それにはいくつかの方法があり、技術も年々進歩している



31



33



PEG



35



36



34

出土したの木簡は、細胞内になっぶり含んだ水で何とかカタチを保っている状態にある。そのため、乾燥して水が蒸発すると、たちまち木簡は変形してしまう。この水を上手に逃がしてやること、それが科学的な保存処理である。

保存処理には、大別して二つの工程がある。一つめが、水を別の物質と置き換えて木の強化を図る工程。奈文研では、強化剤としてポリエチレングリコール(PEG)や高級アルコール(HA)を使用している。二つめが、乾燥工程。特殊な方法として真空凍結乾燥法(FD)がある。水点下・真空状態で水を一気に蒸発させる方法で、カップ麺などにも使われている。強化剤の含浸と併用される。

九頁の木簡は、すべてPEG含浸法とFDの併用で保存処理されたもの。一般に、FDを施すと木肌の色合いが白みがかかる傾向がある。

31は「貽貝鮮」(二枚貝のなれずし)の付札。均斉のとれた形状が目を引く。

33はウリに付けられた荷札か。「瓜」の字は、木簡ではほぼ例外なく草冠を持つ字体で記される。

35は紀伊国から送られた唐米の荷札。上端の形状は切り込みに由来するもの。

36は、大学寮が宿直担当の官人について報告した文書木簡。

34は題籤軸。細い部分に紙の文書を巻き付け、頭の部分にタイトルを記す。



40



38



HA



41



37

十頁の木簡は、すべてHA含浸法で保存処理されたもの。この方法を用いると、木本来の色味に近い自然な風合いに仕上がりますが、木質はやや硬くなる。

37は長屋王家木簡で、米の支給伝票として使われたもの。伝票木簡としては異例の長さである。

41も長屋王家木簡で、37と同じく米の支給伝票。こちらは伝票木簡として標準的な長さといえる。右肩上がりで独特のクセのある書きぶりが目を引く。なお、端に孔が穿たれるのも、伝票木簡に多く見られる特徴である。

38は勤務評定に関する木簡の断片。このタイプの木簡は上端に近い方に側面から孔が穿たれるのが特徴で、紐を通して束ねるための加工と考えられる。38はその孔のところで折れてしまっており、元はずっと長大だったはずである。

40は銭および綿（やや目の粗い絹）の付札。表裏両面に二種類の品目が記されるのに、木簡は驚くほど小さい。

削屑の保存 今昔



プレバート



ボクセル

出土前の木簡を占める削屑。簡へへごと、あの隙へ隙へ取り取り扱いの厄介な削屑にも、保存処理を施すことができたのである。

また、困るのは処理後の保管。以前は、卓上プレバートに封入して保存を図っていたが、これなど取り出しが非常に困難になる。仮に二つの断片が接合する可能性が気づいたとき、確率することにも難しかった。まうのであ。

そのため、現在ボクセルと呼ばれる容器を使用している。二枚目のように開くプラスチックケースの両面に粘着性の高いフィルムを張ったもので、閉じた二枚のフィルムが物をしっかりと包み込む仕掛けになっている。もちろん、開け閉めを取り出し、追加収納なども自由である。だが、乾燥状態の削屑は、それとなく、容易には触れない。開閉に関する悩みは尽きない。



48



46



44

H A含浸法 + F D



真空凍結乾燥機

46は勤務評定関連の文書に付けられた付札。よく見ると、切り込みの形状が左右で異なり、位置も若干ずれる。

48は「二条大路木簡」「岡本宅」で使っている女性の給料として酒を請求している。榎目材で、かつ全体的に傷みが著しく、特に下半にはささくれが目立つ。技術者泣かせの困り者も、H A含浸法とF Dを併用すれば安全に処理できる。

十一頁の木簡は、すべてH A含浸法とF Dの併用で保存処理されたもの。この手法は手間も時間もかかるが、変形のリスクが低く、処理後に湿気によるトラブルが生じる可能性も軽減できる。そのため、変形しやすい榎目材の木簡や、傷みの激しい木簡に対して特に用いられる。いわば保存処理のフルコースである。

44は長屋王家木簡。裏面下半のやや墨痕の濃い部分は「大末呂」と読む。「末呂」や「万呂」は男性名として頻用されたため、大胆に崩したり大きく省略されたりすることが多い。

木簡と動植物

シカ



49



50

ウリ



56



57



考古遺物でもある木簡にとって、出土した遺構や他の遺物との関わりは、調査・研究に際して重要な要素となる。例えば、木簡に書かれた動物や植物が遺跡から見つかる——そんなことも実際に起こっている。



出土したシカの骨



出土したウリの種

「発掘調査により出土した墨書のある木片」と定義される木簡は、本来的に考古遺物としての性格をもっている。そんな木簡は、他の考古遺物とのシンクロを示す場合もある。例えば、木簡に記された動植物が遺跡から見つかる、なんてことも起こるのである。

49・50は「鹿」と記された木簡。その下は出土したシカの四肢の骨である。

49はシカ肉の付札。「干突」とあり、干し肉にされていたことがわかる。

50もシカ肉の付札。「在五藏」は内臓付きであることを意味し、儀式で捧げられる生費用のシカと考えられている。

56・57は「瓜」と記された木簡。その下は出土したウリの種である。遺跡から見つかるウリの種は食物残渣の可能性が高く、木簡中の「瓜」と特に親和性が高い遺物といえるだろう。

56は「一条大路木簡」。「意保御田」より、合計一九六個ものウリが一度に運び込まれたことが記される。

57も「一条大路木簡」。平城京外の「岡本宅」からのウリの通上状である。裏面の「田辺久世万呂」は、岡本宅で働く官人と思われる。

52・54は「鯢」と記された木簡。その下は出土したコイ科魚類の背骨である。

52は武蔵国から「大費」として通上された「鯢背割」（背開きにして干したワナ）の荷札。上端の切り込みはかなり浅い。

骨に隠された秘密



出土したタイの骨

土器や瓦、金属製品といった人間が作り出したモノだけでなく、植物の種や花粉、またはそれらを含む土壌の分析なども、考古学の対象となる。縄文・古墳・中世・近世と時代を問わず、動物の骨や歯や角を対象とした研究は、動物考古学と称されている。

出土した骨を詳細に分析すれば、単に当時どんな動物がいたか以上のことが明らかになることがある。例えば、ウマの骨に認められた病気の痕跡からは、このウマが宮殿造営のための資材運搬用の駄馬として酷使された可能性が指摘された。また、タイの骨の破片に残された線状痕跡（包丁跡）からは、タイの頭を削って出汁をとり、汁物に用いられたとの想定がなされている。

タイは木簡にも多く見られるが、干物（佃煮）やなれずし・鮓・鮓に加まれているものが多い。ほど々である。だが、むしろセシアン・メートルほどの小さな骨が、タイが屋敷頭付のまま都まで運ばれた。木簡にはあまり見られない調理法で食卓に供された可能性を示していた。動物考古学の面白い一面とさえいえる。

ちなみにこのタイの骨は、平城宮跡資料館の考古学コーナーで、骨格標本とともに骨格展示されている。

サメ楚割



58



60

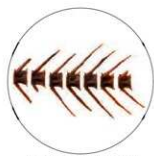
フナ



52



54



出土したコイ科魚類の骨

54はフナと「名吉魚」（ボラ）の付札。一番上の「鮓」の字は、墨痕も黒々として独特の存在感を放つ。「魚」の字は、下半が「大」の字形となっている。

一方、木簡には多く見られるのに、骨などあまり出土しない動物もいる。例えばサメ。58・60はともに参河国より運上されたサメの楚割（ジャッキー状の干し肉）の付札で、他にも類品が多く出土している。それなのに、サメの骨や歯は、遺跡からはほとんど見つからない。

理由のひとつに、サメの場合は水揚げ地付近で加工までおこない、骨を外した干し肉の状態ですべて運ばれた場合が多いことが考えられる。二つの資料群の間にみられる不一致からも、うかがい知られる事情がある。

もつと!! 木簡を科学する

技術は永久不変ではない。木簡の調査・研究の技術だって、日進月歩の最中にある。3D計測により木簡の形状を記録し3Dプリンターでレプリカを打ち出す、またはX線CT装置を用いて同一材料の破片を突き止める——そんな未来も夢ではない、かも!?



65 表面



65 3Dプリンター出力品



61



61 3Dプリンター出力品



68



68 レプリカ



69 表面



69 レプリカ

近年急速に普及しつつある技術の一つ

に、3Dプリンターがある。この技術は今後、木簡の調査・研究にも応用できるかもしれない。一般に、公表される木簡の法量(寸法)データは、長さ・幅・厚さの最大値のみである。もし3D計測で木簡のカチを簡単に測定できるようになれば、記録や公表に資するところ大であろう。また、出力プリンターの精度が向上すれば、今後は木簡のレプリカをより早く、簡単に、たくさん作製できるようになることも期待できる。

65は多機嶋(種子島)に関わる木簡。嶋に赴任した官人の勤務評定関係の報告書を管理する付札とみられる。

61は変わったカタチの付札。上端の右辺のみに切り込みが施され、加えて孔も穿たれている。

一方、68・69は既存の手法でレプリカが作製された木簡。ぜひ、実物とレプリカを見比べてみていただきたい。

68は、名前が書かれた人物の指の間節の位置に印(画指)をつけて、個人IDカードとして機能した木簡。

69は二条大路木簡。ニワトリなどとあわせてネズミが通上されているのが注目されるが、これは鷹狩り用のタカの餌と考えられている。

美作國勝田郡

期野群膚水

富月昔却田劉竟太御飯米倉石橋

杉依部不傳収収御等急下生月

美作國遠敷郡
美作郡美作郡
美作郡美作郡
美作郡美作郡

御は
美作郡
美作郡
美作郡
美作郡

年輪は語る

木簡×科学こぼれ話⑤

これまで、主に美術工芸品など「伝世木製品」に対しておこなわれてきた、マイクロフォニクス線CITを用いた非破壊年輪年代調査。奈文研では最近、この技術を出土木製品に適用するという、注目すべき研究を発表した。

対象としたのは、平城京二条大路から出土した二枚の墨面板である。この墨面板に対しX線CIT装置を用いて、年輪の断面画像を撮影し分析したところ、両者の年輪幅はクラフパターンが著しく一致し、同一原木から製材されたものであることが明らかとなったのである。

また、両者の断面面の凹凸は、あたかもかみ合っかのような形状を呈している。この部分さらさらに詳細に分析すれば、両者が接合するところを突き止められる可能性もあるという。仮にそうならば、墨面の断面解釈の幅も広がるであろう。

今回は墨面板の年輪パターンが「標準年輪パターン」と一致せず、年輪年代は不明であった。だが、保存処理後であった。年輪の断面画像は撮影できただから、今度は出土木製の年輪年代測定とどうん実測できるよようになるかもしれない。木簡への応用も期待される成果である。



平城京二条大路出土墨面板

最近、奈文研では、二条大路出土の墨面板に対し、マイクロフォニクス線CITを用いた年輪年代調査をおこなった（詳細は「こぼれ話⑤」参照）。木簡も、墨面板と同じく木製品の種類。この手法が応用できるようになれば、年紀のない木簡の年代を推定する手がかりを得たり、バラバラになってしまった木簡を同一材と特定するのに役立つかもしれない。

73は美作国から送られた米の荷札。税目は「唐米」と明記されるが、年紀は省略されている。裏面の字配りが不均一なので面白い。

75は長屋王家木簡。刈り取った稲の収納場所について指示を仰ぎたい旨が、漢字を日本語の語順のままに並べる和風漢文で記されている。「当月廿一日」と月・日が書かれるのみで、年紀はない。

70は若狭国からの塩の荷札。若狭は塩の一大生産地である。現状では、中央付近で二片に分かれてしまっている。

72は、平城京左京三条二坊六坪に所在する宮跡庭園で見つかった木簡。下半に「辛酉に入ながら」の「ながら」が、細字右寄せの万葉仮名で「奈加良」と表記されている。現状では細かく四片に分かれてしまっている。

2014年10月18日

編集・発行

独立行政法人 国立文化財機構
奈良文化財研究所

〒600-8007 奈良市佐紀町247-1(仮設庁舎)

<http://www.nabunken.go.jp/>

表紙デザイン

市原 夕貴

印刷

能登印刷株式会社